様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１３５５

研究課題名（和文）既存の集団の枠を越えて新たな学びを生成する「越境活動」のフィールド研究と理論構築

研究課題名（英文）Theoretical study and field research of boundary crossing activity that generates new learn beyond cultural frameworks of existing communities

研究代表者
香川　秀太（Kagawa, Shuta）

青山学院大学・社会情報学部・准教授

研究者番号：９０５５０５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，既存の集団の枠（境界）を越え，異質な人々が緩やかに繋がり学び合い，時に組織変革や社会変化を目論む「越境活動」に焦点を当て，学習論（活動理論）を軸にして，１）職場，２）職場外，３）社会運動といった複数のフィールドで発生している越境事例を対象に，越境活動の内実の解明，実践，理論構築を行った。その結果，異なる集合体の文化が出会う中で発生する新たな知のミクロな形成過程と，越境活動を先鋭化することで発生する集権制，資本制に代わる分散型社会の諸特徴の一端が解明された。そして，それらを総括し，越境論の理論的体系化を行った。

研究成果の概要（英文）：This study focused on “boundary crossing” that heterogeneous people loosely associate, learn together, and change organizations or social world beyond borders among different communities. We revealed actuality of boundary crossing and developed the practice, and expanded the theory furthermore. Especially we focused on 1) workplace, 2) out of workplace, and 3) social movement and researched them through qualitative interview, conversation analysis, discursive analysis, and action research. Consequently we indicated how new knowledge or relationship is created in the micro process that heterogeneous collective had a dialogue, and some characters of future distributed society constructed by expanding boundary crossing that can replace capitalism. We advanced the theory of boundary crossing or activity theory through integrating their discussion.

研究分野：社会科学，教育心理学，社会心理学

キーワード：活動理論　越境　学習論　創造　交換　マルチチュード　社会運動　ポスト資本主義

１．研究開始当初の背景

本研究は，既存の集団の枠（境界）を越え，異質な人々が緩やかに繋がり学び合い，時に組織変革や社会変化を目論む「越境活動」に焦点を当て，学習論（活動理論）を軸にして，複数のフィールドを対象に，越境活動の内実の解明，実践，理論構築を行うものである。

越境活動は，昨今，例えば，職場では，既存の部署や役職や上下間の壁を越えフラットに協働し，新たな知の創造を試みる取り組みが，職場外では，異分野や異組織の人間が日頃の枠を越え，非公式に集まり交流する学習コミュニティ作りが広がった。さらに，社会活動，社会運動（例えばデモ）においても，以前は，特定の団体や社会階層に限定されていたが，昨今ではそれらの枠を越え，非常に多様な人々が，より自由なスタイルで参加する形に変わってきている。

こうした越境は，明確な分業制や階層構造を主軸とした，従来の官僚型，集権型，縦割り型の組織形態中心の社会をしのぎ，それにとって代わりうる，現代的な新たな社会形態である。しかし，こうした活動はその新しさもあって研究の蓄積が浅く，次の課題がある。

越境過程における人々の複雑な学習やミクロな相互行為の過程等，実態の詳細の解明，そして実践研究が手薄であることと，逆に，心理学や認知科学における哲学的理論研究の不足ゆえの発展の行き詰まりである。

２．研究の目的

そこで，本研究では，１)職場，２)職場外，３)社会運動という複数の現場を対象に，面接，観察，アクションリサーチを行い，越境実践の特徴を解明するとともに，哲学，政治学等の周辺領域の理論研究を進め，それらを統合して越境論を拡張させる。

３．研究の方法

１）職場のアクションリサーチ

伝統的に，集権体制をとる医療機関から，A 病院（の看護部）を調査のフィールドとしてアクションリサーチを行い分析した。

最初に行ったA病院でのインタビュー調査をふまえ，A 病院の新人看護師研修や実施をめぐる諸問題に焦点を当てることにして，次の実践開発を行った。それまでのトップダウン的な意思決定から，研究者と看護師とが協働して，その病院の実情に沿った新人看護師の新たな教育システムを，現場で新人指導にあたっている看護師らが所属部署を越境して対話し創造するプロジェクトの設計・実施であった。そしてそこで生成されていった，知の創造に伴う参加者間の関係性ないし相互行為のミクロな変容過程について，談話・会話分析の手法を用いて分析した。

２）職場外・大学外

社会人が職場で培ったビジネススキルを活用して，職場外にて，NPO 法人等の非営利活動を活性化すべく，無償の社会貢献活動を行う「プロボノ」についてインタビューや観察による質的調査を行い，職場外への越境経験の中での学習の特徴を分析，考察した。その際，柄谷行人（2014）の交換論を導入した。柄谷の交換論とは，社会構造を，A)親和形成のための互酬交換，B)税と保護の国家‐国民間交換，C)金銭と商品との資本制的商品交換，そして，D）資本制の次の未来の交換形態としてのアソシエーション（互酬交換を商品交換社会において互酬交換を高次元で回復する運動）の４類型から捉え，未来の社会の構築を目指す理論である。

３）社会運動

東日本大震災以降，各地で発生した反原発デモについて主に官邸前活動についてフィールド調査と哲学的な理論考察を行った。

４）理論的検討

以上の複数の現場での実践や調査をふまえつつ関連哲学を導入して，越境論（活動理論）の拡張を試みた。

４．研究成果

１）職場における越境

A 病院の研究から下記が明らかとなった。

現場主導の異部署間越境対話は，次のように進行しながら，上層部主導の際には示されなかった新しいアイデアが創造された。談話・会話分析の結果，それは，プランや台本のない即興的な対話でありながら，突然アイデアが発生するわけではなく，次の秩序・段階を経て次第にアイデアが生成されていた。

①異部署間，研究者‐看護師間での過去の具体的経験（A 病院固有の歴史性）の掘り起こしと共有，②その一方での過去に体験したことのある発想（既体験案）への束縛，③過去の研修方法が抱えていた諸矛盾の漸進的な可視化と共有，④外部の研究者による「ナンセンスな発想」の提示と看護師の強い拒否，⑤過去の既体験方法に基づく打開策の模索と行き詰まり，⑥行き詰まりを経てからの，「ナンセンスな発想」の修正的再提示と看護師による未体験方法の拡張的提示，⑦未体験方法の採用への看護師の戸惑いと既体験方法への回帰による行き詰まり，⑧未体験方法を拡張させるリソースとしての既体験の活用，⑨新奇なアイデアの生成であった。

以上の越境的対話実践を経て，看護師たちは，従来の上層部から方針を与えられそれに従うか不満を述べるかする主体（間関係）から，自らのそれまでの経験に束縛された状態から，既経験を未体験のアイデアを生み出す創造のリソースに転換させていく主体（間関係）へと次第に変化させた。また，日ごろの看護師業務とは異なる能動性を発現させて，創造活動にコミットしていき，周囲を驚かせ評価を上げる看護師も現れた。さらに，院内の他の会議においても，対話型創造実践が模

倣される他への「伝染的拡がり」も現れた。
これらの結果をふまえ，諸矛盾の集合的な可視化と行き詰まりを経て，外部の異質な（ナンセンスな）知識と内部の具体的経験とが結合すること（異なる歴史性の出会い＝「間-歴史性」）による諸矛盾の突破，あるいは，対話集団の集合的発達と，諸個人の創造的アイデンティティとの同時的な発達のミクロな過程が示された。

２）職場外・大学外における越境

プロボノ活動のインタビュー調査と理論的考察から，次のことが明らかとなった。第一に，普段異なる企業に属す社会人たちが一堂に会して，ビジネススキルを活用して NPO 法人等を無償で支援する越境活動（職場から外部への越境，および異職種間の越境）の背景には，東日本大震災（福島原発事故）の体験による，それまでの利益中心社会への疑問，消費社会ビジネスへの疑問，慣習や規範の多い職場での自由の抑圧であった。第二に，プロボノを通して彼らは，ビジネススキル，つまり資本主義的商品交換（の中で身に着けたスキル）を，無償の互酬交換へ質的に転換させること（NPO 的な社会貢献文化や発想に営利スキルを応用させること），その過程での，金銭的利益とは異なる（贈与相手である NPO 等からの）厚い御礼等の感情的返礼を得ることの驚きと喜び，プロボノメンバーとの共愉的な互酬関係の構築，自由な創造を通した主体性の発現を経験していることが明らかとなった。さらに，プロボノ活動の経験を経て，職場にて人間関係構築（互酬の回復）を図ったり，資本制ビジネスへの疑問を強め，あるいは，社会活動の面白さに覚醒して，仕事を辞める者もいた。

しかし一方で，資本制的な利益獲得中心思想や管理主義的発想を，（フラットな互酬交換に転換させず）そのまま普段のビジネスの手法通りに，NPO 法人の支援に活用しようとするプロボノワーカーないしチームは，NPO 法人からの抵抗や課題も発生していた。

このように，原発事故にみられた国家や資本制による抑圧を契機に，アソシエーションの構築に向かう人々の動きが確認された。

先の１）職場内での越境も，自由や創造の抑圧からの解放であり，その点がプロボノにも共通するが，プロボノの場合は，第一に，明白に商品交換から離脱する動きと商品交換を転換して互酬交換に活用する動きとが見られること，職場外での活動であることから，より組織的な束縛から解放された活動であること，それゆえ，トップダウンからボトムアップへというより，その二元論的枠をそもそも離れた活動である点が特に相違する。

こうして越境活動の深化版ともいえるプロボノは，資本制の次のアソシエーションの萌芽に相当しうることが示唆された。これは従来の越境論（活動理論，学習論）では全く議論されてこなかった点であった。

なお，プロボノ研究をふまえ，実践研究として，活動理論の一派のパフォーマンス心理学（Holzman，2009）の理論も実践的に導入しつつ，プロボノ活動を教育活動に転換させる教育実践の開発も試みた。具体的には，代表者の大学ゼミにて，学生たちが日ごろ培っているが普段の正規の授業内では殆ど活性化されることのない，様々な特技（趣味，サークル活動等）を，孤立した青少年の支援を行っている NPO 法人の活動に創造的に活用する試みを行った。そこでは，通常の授業では見られない共愉的な関係形成，学生や青少年の能動性の想定外の発現等がみられた。

３）社会運動における越境

社会運動の，特に官邸前反原発デモに焦点化した調査を実施し，下記が明らかになった。

第一に，反原発デモは，60 年代後半，公害・巨大開発に対して労働組合や知識層が中心の運動，70 年代の日本の原子力船「むつ」の放射能漏洩事故等を契機にした運動，80 年代のチェルノブイリ原発事故による運動を経て，2011 年 3 月 11 日の福島原発事故にて全国各地に分散的に発生する形で再燃した。この点で，第一に，非継続的だが長命であること，第二に，仕事で金銭を得ることとは異なり，明確な報酬はないにもかかわらず高い動機を参加者が持っていること，第三に，2011 年以降の運動は，過去の運動と異なり，特定の代表を置かず，多様な団体や個人が活動に参加するという中心のないフラットな繋がりであること，第四に，それゆえ，会社等の通常の団体や集権組織とは異なり，参加者が流動的で集団としての境界が曖昧という特徴が見出された。

これらの特徴は，活動理論家の Engeström（2009）のいう「野火的活動」や，哲学者の Hardt&Negri(2004)がいう「マルチチュード」に該当しうるものと考えられた。

そのうえで，現場の調査と理論考察から，こうした，現代的な特徴をもつ，境界の曖昧で緩やかな分散型ネットワークの特徴を示す，或いはその特徴を分析するための視点になりえる次の諸特徴を取り出した。

第一が，「野火的オブジェクト」である。反原発デモにおいては「反原発」という概念自体が野火的オブジェクトに相当する。これは，誰でも理解可能という極めて単純な意味を持つ概念でありながらも，それが可能な社会を考えるほど複雑な意味を帯びるという矛盾を抱えた概念であり，その矛盾故に，極めて広範囲の人々に拡散する拡散性，多様な人々を引き付ける結節性，多様な形に展開させることが可能な未完性という特徴を持つ。

第二が，「ハイブリディティとプレイ」である。近代のデモは，画一的ではなく，多様な個人，団体，服装（コスプレ等），多様な表現（ラップ調，ロック調等のアレンジが加えられたシュプレヒコール）からなる，プレイフルでハイブリッドな繋がりである。これ

は，反原発が怒りの表明でありながらも，享楽にも思える活動であること，つまり，「怒りVS楽しさ」という矛盾した情動環境を生成しており，これがデモの場特有の雰囲気を形成していた。また，この情動矛盾が，周囲から関心を呼び込み話題性や人を集める一方で，ばかげた集まりだという批判も呼び込むというさらなる矛盾も形成していた。

第三が，「イデオローグ」である。デモは，上記のハイブリッドで多様な諸主体に対し，同じ「原発反対者」という画一的で確定的なイデオローグ（特定のイデオロギーの担い手）を構成する活動である一方で，それらが望む脱原発社会の具体的な未来の姿は全く不確定であるという「未完のイデオローグ」を生産する実践でもある。また，政府とデモの言説を分析すれば，反原発デモの参加者と国は互いに同じく「国民を守る必要性」を訴えながらも，政府（当時野田政権）は再稼働を，デモは再稼働禁止を訴えるという分裂が生じていた。これは，政府が「経済的損害を受ける国民」「停電のリスクを背負う入院患者」を守るべき国民と位置づけ，デモ隊が「福島の避難者」「原発地域でリスクを背負う住民」を守るべき国民と位置付けるという，国民言説のズレに由来する。そこで，政府は，デモ隊がいう国民も保護する意味を与えるべく「『安全な』再稼働」という言説を用いる。しかし，そもそも原発事故により，国家の言う「安全」がむしろ「安全ではないこと」を意味するものに転換してしまっているため，安全を訴えれば訴えるほどむしろ「安全ではないこと」の意味が強化されていく矛盾に直面し，デモとの対立がますます強化され，結果デモはますます燃え広がっていた。

第四が，「境界の運動」である。デモは，国家が信用できない今，代議士ではなく国民が直接意思決定を下す直接民主主義を訴える思想が背後にあった。しかし，現実には国家が脱原発の方針を決定する権限があるから，国家が脱原発に向けて動くことを促す抵抗運動である。よって，「アンチ代議制でありながらも実行を政府に依存」という，デモと政府，国民と国家の間の境界線の引き方についての矛盾を抱える。こうした抵抗と協力の境界線の揺らぎは，警察との関係にも見られた。現場では警察は，圧力どころかデモの場に参加者を親切に誘導するほど一見非常に協力的でありながらも，デモとしては「警察との癒着やなれ合い」という周囲からのラベリングや批判を避けねばならないという矛盾を抱えていた。つまり，対立的境界とその境界を弱めた協力関係との矛盾と，それによる，境界の微妙かつ複雑な運動が見られた。

このように，デモが複数の諸矛盾と，その諸矛盾の複雑な動きから成り立つ活動であることを示し，これを，哲学者アルチュセールがいう「矛盾の重層的決定論」を導入して論じた。すなわち，デモは，反原発という個別の主張を超え，集権体制や経済中心社会から，分散的，自発的に，プレイフルで緩やかにつながり，直接民衆が意思決定を担うような社会形成のモデルを実験的に提示するような活動であり，しかしそこでは多様な諸矛盾が生成され運動する場であることが示され，そうした分散ネットワークのなかで生じる矛盾の動きを分析していく必要性（そしてそのために着目すべき視点）を示した。

以上，現代的なデモの特徴を分析するとともに，マルチチュードや野火的活動の理論に対して，重層的決定論による串を通した上記の4視点を示して越境論を拡張させた。

4）理論的検討

以上の諸研究から，越境論を総括した。

まず，越境のタイプを次の4つに整理した。①時間的に前後する形で状況間を横断する「状況間移動」，②ある状況にとどまりながら別の状況にアクセスする「手段的横断」，③異質な文化が同じ時間と場所で交わり新たなモノや知識や実践を創造する「ハイブリダイゼーション」，④AからBへの移行というよりも，より境界が曖昧な形で，あちこちで分散的に共愉的で自発的な活動が生起する「分散型ネットワーク」であった。

次に，越境過程で生じる変化や学習の特徴を次の4つに整理した。①それまでの自明性が新しいコンテクストへ参加することで揺らぐ「文化的動揺」，②動揺に対し，馴染んだそれまでの文化的感性を維持する方向へ努力する「異文化抵抗」，③馴染んだ文化から徐々に距離をおいて相対化し，新しい文化的実践を取り入れ始める「異文化専有」，④完全に古い文化を捨て去り，新しい文化を取り入れるというより，両者の矛盾を創造的に昇華し，どちらにも還元できない「第三の知」を生み出すことであった。

さらに，本諸研究を通し，それまでの越境論が，（表1の要素は含まれながらも）マルクスのいう下部構造の議論を真正面から取り上げてはこなかった課題を指摘し，資本主義の次の社会構造を模索する「分散ネットワーク学習論」へ転回すべきことを示した。分散ネットワーク学習は，越境論が集権モデルをアンチテーゼとして発展したが，さらにそれを先鋭化したものである。

表1．集権モデルと分散ネットワークモデルの特徴

	集権モデル	分散ネットワークモデル
権力	特定の人物・層への集権化	多様な諸個人への権力の分散化
創造への参与	特定の権力者による統制や変革	多様な成員による共生的で自由なコミュニティ創造
生産物	物質生産中心	非物質生産の領域拡大
意思決定	画一的統一性	多様的創発性
財	財の獲得	財のシェア・コモンズ
交換	商品交換や経済資本中心	互酬交換や社会関係資本の回復
境界	集団・分野の細分化・個室化，境界の増大	集団間・分野間の越境の拡大，境界の縮小
志向性	確定志向	未確定志向

分散ネットワーク学習論では，ローカルかつ具体的な実践を調査するフィールド研究の際に，集権制や資本制の正負の部分につい

て検討するとともに，マクロな歴史的，哲学的理論の研究を進めながら，それらを超える新しい社会の在り方を模索する。そのために，２）で導入した柄谷のアソシエーション論や，３）で導入したマルチチュード論を，活動理論ないし学習論的フィールド研究とさらに有機的，発展的に接合していく必要がある。そうして，上部構造の実践が，下部構造の変革にどのように関連するかを論じていくアプローチである。

このように，本研究を通して，越境論の体系化を進めるとともに，次なる研究の方向性を取り出すことができた。

＜引用文献＞

Holzman, L. 2009 *Vygotsky at work and play*. London & New York: Routledge.

Engeström, Y. 2009 Wildfire activities: new patterns of mobility and learning. *International Journal of Mobile and Blended Learning*, 1(2), 1-18.

柄谷行人 2014 帝国の構造：中心・周辺・亜周辺　青土社

ネグリ，A. & ハート，M.／幾島幸子（訳）2004 マルチチュード：＜帝国＞時代の戦争と民主主義　NHK ブックス

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①香川秀太・澁谷幸・三谷理恵・中岡亜希子 2016 年　「越境的対話」を通した新人看護師教育システムの協働的な知識創造：活動理論に基づくアクションリサーチと対話過程の分析　認知科学，24(1)，355-376. 査読有

②澁谷幸・山本直美・中岡亜希子・三谷理恵・田中亮子・香川秀太　2017 年　2 段階ローテーション研修を受けた新人看護師の経験　第 47 回日本看護学会論文集，151-154. 査読有

③香川秀太　2016 年　視点１　心理学から見る越境　リクルート組織行動研究所「RMS Message」，44，22-23．査読無

〔学会発表〕（計 11 件）

①香川秀太　2017 年 8 月 17 日　Breaking through the constraints by capitalism: Cases of creative practices in Fujino area.　Japan All Stars Workshop “Future of performatory psychology in Japan”セッション「交換とパフォーマンス」，筑波大学東京キャンパス，口頭発表

②香川秀太　2017 年 3 月 12 日　台本のないゼミの実践：創造的交換へ　筑波大学国際シンポジウム「performatory science of living together in progress」，筑波大学東京キャンパス，口頭発表

③香川秀太　2016 年 10 月 9 日　重層的時間論から新しいつながりを読み解く：Vygotsky，唯物論者，歴史　日比野愛子（企画），グループ・ダイナミックスの＜時間＞（その１：広げる）：邂逅の時間　日本グループダイナミックス学会第 63 会大会，九州大学，口頭発表

④藤澤理恵・香川秀太　2016 年 9 月 25 日　プロボノ活動にみるビジネス／ソーシャルの越境的対話：「交換」に着目して　日本質的心理学会編集委員会（青山征彦・香川秀太）企画，最先端の社会現象から考える新しいコミュニティの姿とは？：アフリカ難民，プロボノからみる「ゆるやかなネットワークと越境する対話」　日本質的心理学会第 13 回大会，名古屋市立大学，口頭発表

⑤ Hirose, T., Kagawa, S., & Moro, Y. September 23, 2016. Exercising power through changing the mode of exchange: or as Fred said, “Hey man! You can do better by giving rather than getting.” *Paper Presented at Performing the World 2016: Can We Perform Our Way to Power?* at All Stars Project Inc., New York City. 口頭発表

⑥澁谷幸・山本直美・中岡亜希子・三谷理恵・田中亮子・香川秀太　2016 年 8 月 5 日　2 段階ローテーション研修を受けた新人看護師の経験　第 47 回日本看護学会（看護教育）学術集会，大津プリンスホテル，ポスター発表

⑦青山征彦・香川秀太・有元典文・岡部大介 2015 年 12 月 12 日　状況論とインタラクション：昨日，教育，そして明日へ　日本認知科学会 2015 年度冬のシンポジウム（インタラクションから革新へ），東京大学本郷キャンパス，口頭発表

⑧香川秀太・藤澤理恵　2015 年 10 月 4 日　ゆるやかなネットワークの理論的視座：社会活動，社会運動からのパフォーマンス　青山征彦・香川秀太・岡部大介（企画），自主企画シンポジウム（「ゆるやかなネットワークをどうとらえるか：コスプレ，アイドルファン，社会運動から考える」）　第 12 回日本質的心理学会，宮城教育大学，口頭発表

⑨香川秀太（指定討論）　2015 年 10 月 4 日　境界への問いは何をもたらしうるか　岡部大介・中塚朋子（企画），質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム（「境界のデザイン」と質的研究）　第 12 回日本質的心理学会，宮城教育大学，口頭発表

⑩広瀬巧海・香川秀太　2015 年 8 月 28 日　公園で放課後を過ごす中学生への“学習”支援：英語ダンス教室における実践の記録　新原将義・太田礼穂（企画），自主企画シ

ンポジウム　活動への発達的介入を考える：「発達の最近接領域」の観点から　日本教育心理学会第 57 回総会，朱鷺メッセ（新潟），口頭発表
⑪江村利江・山本直美・澁谷幸・中岡亜希子・三谷理恵・香川秀太　2015 年 8 月 28 日～29 日　「みんなで育てる」新人教育による看護師の新人看護師教育に対する認識の変化　第 19 回日本看護管理学会，ビッグパレットふくしま，ポスター発表

〔図書〕（計 15 件）
①香川秀太　2018 年　越境論へ，そして分散ネットワーク学習論へ：社会的交換の一次モードと二次モード　青山征彦・茂呂雄二（編著）　スタンダード心理学　学習心理学，pp. 81-108，サイエンス社
②香川秀太　2018 年　アクションリサーチ：社会構成主義からのアプローチ　三浦麻子（監修）・佐藤寛（編）心理学ベーシック第 4 巻　なるほど！心理学観察法，pp.55-72　北大路書房
③ナジール，N.，ローズベリー，A.，ウォレン，B.，＆リー，C.D.／三輪聡子・香川秀太（訳）2017 年　文化的プロセスとしての学び：多様性を通した平等の達成　R.K.ソーヤー（編）／秋田喜代美・森敏昭・大島純・白水始（監訳）望月俊男・益川弘如（編訳）学習科学ハンドブック〔第二版〕第 3 巻：領域専門知識を学ぶ／学習科学を教室に持ち込む，pp.139-156　北大路書房
④香川秀太　2017 年　共愉的なコミュニティづくり：「カジュアルな社会活動」としての教育，藤川大祐（編著）　越境する授業：オルタナティブ教育に学ぶ　授業づくりネットワーク，20，pp.44-49　学事出版
⑤香川秀太　2016 年　「創造的評価」の重要性：非公式な学生コミュニティがインターンシップを変える　田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚（編著）　学校インターンシップの科学，pp.143-170　ナカニシヤ出版
⑥ロブマン，C.＆ ルンドクゥイスト，M.／ジャパンオールスターズ（有元典文・岡部大介・香川秀太・若林庸夫・森下奈美子（6 章担当））（訳）　2016 年　インプロをすべての教室へ：学びを革新する即興ゲーム・ガイド，pp.139-181　新曜社
⑦フィルムアート社・青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース（苅宿俊文・高木光太郎・鈴木宏昭・香川秀太）（編著）　2015 年　ポートフォリオをつくろう，総 159 頁　フィルムアート社
⑧香川秀太　2015 年　「違い」に出合い「異質さ」を喜ぶ：「越境する対話と学び」としての出前授業　藤川大祐（編著）　出前授業完全マニュアル，授業づくりネットワーク，20，pp.50-53　学事出版
⑨香川秀太　2015 年　「未完の未来」を創造する媒介物：異時間のゾーンと活動理論（その１）　安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）　ワードマップ TEA 理論編，pp.139-146　新曜社
⑩香川秀太　2015 年　「未完の未来」を創造する媒介物：異時間のゾーンと活動理論（その２）　安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）　ワードマップ TEA 理論編，pp.147-153　新曜社
⑪香川秀太・青山征彦（編著）　越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ，総 393 頁　新曜社
⑫香川秀太・青山征彦　2015 年　序　異質なコミュニティをまたぐ，つなぐ　香川秀太・青山征彦（編著）　越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ，pp.1-15　新曜社
⑬香川秀太　2015 年　「越境的な対話と学び」とは何か：プロセス，実践方法，理論　香川秀太・青山征彦（編著）　越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ，pp.35-64　新曜社
⑭香川秀太　2015 年　矛盾がダンスする反原発デモ（前篇）：マルチチュードと野火的活動　香川秀太・青山征彦（編著）　越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ，pp.309-336　新曜社
⑮香川秀太　2015 年　矛盾がダンスする反原発デモ（後篇）：アルチュセールの重層的決定論によせて　香川秀太・青山征彦（編著）　越境する対話と学び：異質な人・組織・コミュニティをつなぐ，pp.337-370　新曜社

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
該当なし
○取得状況（計 0 件）
該当なし

〔その他〕
ホームページ等
http://k-shu.xsrv.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
香川　秀太（Kagawa，Shuta）
青山学院大学・社会情報学部・准教授
研究者番号：90550567

(2)研究分担者
該当者なし

(3)連携研究者
該当者なし

(4)研究協力者
藤澤理恵（Fujisawa，Rie）
リクルート組織行動研究所